

白山・能登の観音信仰

——古代の補陀洛信仰にふれて——

一 白山と泰澄伝承

越前・加賀・美濃三国の境にまたがる白山（最高峰二七〇二メートル）は、古代においては巨大な水分山として靈威ある女神の住まう山とされた。『文徳実録』仁寿三年（八五三）十月条に、「加賀国白山比咩神從三位」とあり、『延喜式』にも加賀国石川郡に「白山比咩神社」とみえる。修驗道以前、神仏習合以前は、この白山比咩神こそが山の女神また水神・龍神として崇められていたのである。そこへ奈良時代に、観音信仰が習合していった。白山比咩神と観音とを結びつけたのは、「越の大徳」と呼ばれた泰澄和尚である。

(1) 天徳元年（九五七）に成立したと本文末尾および識語にいう『泰澄和尚伝記』によれば、泰澄は三神安角の二男として越前の麻生津に生まれ、十代半ばから夢告によって十一面観音の信者となり、越知山で修行に励んで験力を得た。その間、能登島から尋ねて来た臥行者と出羽の船頭だった神部淨定という二人の弟子をも得た。そして靈龜二年（七一六）、天衣璽珞で身を飾った貴女の夢告を受け、翌養老元年（七一七）、三十六歳の時、宿願であった白山登攀にかかる。ためにまず白山山麓の伊野原で修行していたところ、かの貴女しばしば現じて、その東の林泉へと和尚を導き、また吾が身はすなわちイザナミノミコトであり、今は妙理大菩薩と号すと正体を明かし、「抑も吾が本地の真身は天嶺に在り。往きて礼すべし」といざなつた。ついに泰澄は天嶺禪定（山頂）に登攀し、緑碧池のほとりで祈りをこらしたと

神 野 富 一

ころ、まず池中から九頭龍王の形が示現した。しかし泰澄は、それは方便の示現であり、本地の真身ではないと繰返し責めた。そうしたところ、ついに真身の「十一面観自在尊の慈悲の玉躰」がたちまちに出現した……。その時泰澄は、左の孤峰の小白山別山大行事（本地聖観音）、右の孤峰の太己貴（本地阿弥陀如来）にも出会った。泰澄は臥行者、淨定行者のみを供とし、天嶺禪定で一千日間練行した。その後白山には多くの行者が登攀するようになった……。

現存の『泰澄和尚伝記』は伝説的要素を多く含み、また成立時以降の増補も疑われるけれども、その叙述から、古代に女神信仰の行われていた白山を越前の泰澄という仏教的な呪術者が観音の山として開いたという伝承が、遅くとも平安中期ごろには白山信仰圏の中で行われていたということは知られる。『伝記』中には十一面観音の垂迹がすなわちイザナミノミコト・妙理大菩薩であると語られているが、それは後世の変容であり、泰澄が出会ったもとの山の女神は『文徳実録』や『延喜式』に出る白山比咩神であったに相違ない。(2)

(2) さて、では八世紀初期という早い時代に泰澄の携えていたというその観音信仰とはどのような性格のものだったのか。それをうかがうためには、泰澄その人、また二人の弟子の出自が注目されるのだが、この点についてはすでに山岸共氏がすぐれた考察を加えている。それを参照するに、鎌倉時代の『淡嵐拾葉集』に泰澄が越州浅津の「船渡子」、つまり船頭の子であったとあり、これには真实性が認められる。(3) そうみることによって、彼が麻生津（浅津・日野川水系の要津にして古代官道との交点でもあった）の生まれであることも、二侍者が海から来て泰澄に投ずるこ

とも、彼らが船に対し呪術を行使することも、すべて海民に関連あることとして自然に理解できるからである。泰澄は日野川水系の海民の出身であったと考えられる。一方、二人の侍者もまた日本海海運にかかわる海民であったらしい。『伝記』に、臥行者は能登島からやって来たとあり、浄定行者は出羽から官米を運んでいた船の船頭だったとある。日野川水系の水運と日本海海運は一元的に運営されていたので、泰澄と二侍者は結ばれたのである。結局、「泰澄伝承は、海民が伝えていた、海民出身の偉大な呪術者の物語であったのだ」。

多くの河川を流出する白山は、むろん古くから海民ばかりではなく山民や農民にも敬仰された山であつたらう。山民や農民にとって、白山比咩神は山の神としてまた水神・龍神として、大いなる恵みをもたらし、時には恐ろしい相貌もあらわす、生命や生活に直接する存在であつたにちがいない。白山はそうして山民・農民・海民がひとしく敬仰する山だったのだけれども、しかし泰澄伝承やそれを取り巻く状況の分析からすると、白山に観音信仰を持ち込み、観音と白山比咩神の習合をなしとげる動因となつたのは、山岸氏の説くように海民の活動であつたと考えられる。

泰澄が海民の出自であつたという推定、また海民の観音信仰ということに関しては、白山とともに越知山の信仰も注目される。『泰澄和尚伝記』によれば、白山登頂以前、若年時より泰澄が修行したのは越知山であり、また壮年時のさかんな活動を経た後、晩年の十年間ばかりをおくつたのもその山だった。泰澄は越知山を修行や活動の拠点としていたらしい。越知山は泰澄の出生地とされる麻生津から西方十数キロにあるが、その位置は麻生津から見ると白山とはまるで正反対の方角である。なぜ白山の仏教化をライフワークとしたらしい泰澄が、まず白山とは正反対の方角の越知山に赴き、そこを本拠としたとされているのか。それは、『伝記』自体が越知山側で作成され、越知山の宣揚を目的としたという理由もたしかにあるだろうが、それだけではなく、越知山が泰澄当時から海民の信仰する山だったからだろう。越知山は標高六一三メートルばかり、航海の指標や漁民の山アテ(山ダメ)の目印ともなる山であり、かつてはその頂上付近から日本海も見渡せた⁶。やはり海民の出身であつたと考えられる臥行者が能登島から目指してやって来たのも、そして泰澄に仕えた彼が北海を行く船に対して飛鉢法を行い、ためにまた出羽の船頭神部

浄定を引き寄せたのもこの山であつた。これらの『伝記』の伝承を事実視するといふのではないが、泰澄伝承の成立基盤に海民の越知山信仰が存在したことは推定されてよい。海に近い越知山からより奥深く丈高い白山へ、それは古代越前の海民がたどり入つた信仰の伝播の道すじと勢いをも示している。

越知山のふもとの大谷寺は泰澄の開創にして修行、終焉の地でもあつたと伝え、修験の寺として往古は隆盛を誇り、泰澄・修験関係の宝物や旧跡を今も多く伝えているが、また山頂の越知神社とともに昔から今に至るまで漁民の信仰が厚いというのもうなずかれる。

二 白山のフダラク信仰

巨大な水分山として霊威ある女神が住まうとされた白山は、山民・農民のみならず海民にも広く信仰された。海からのぞむ神聖な山として、また航海の指標や山アテの山として、古来航海者や漁業者の信仰を集めてきた。加賀側の白山信仰の拠点、石川県鶴来町の白山比咩神社では、長和五年(一〇一六)以来、加賀の七湊から御贄を受ける例であつたという(『白山本宮神主職次第』)。現在でもその伝統を継ぐ御贄祭が毎年六月に漁業関係者によつて盛大に行われ、海の幸を献進、漁の無事を感じ、大漁を祈願している。神社には船絵馬の寄進も多いという。

その白山の信仰に早くに観音信仰をもちこんで白山を仏教化したのが海民出身の泰澄だったと考えられるのだが、ではその泰澄ら海民は、八世紀初期という古い時代にどのような観音信仰者となつたのだろうか。

白山と観音信仰の結びつきについて、先の山岸氏は、もともと水神としての白山比咩神の信仰は海民にも行われていた、そして白山比咩神はやはり海民の信仰した観音と習合したので、海民と観音、観音と白山の結びつきは、「観音は民間仏教で現世利益の神(仏)であり、より直接的には危難よけの神であつたから、海上で遭難の危険にさらされやすい海民には受け入れやすい神であつた。また観音の浄土補陀落は海に近い山上にあると説かれていたから、この点でも白山と結ばれやすかつたであろう」と、海民の間に海上守護の観音信仰が受容されやすかつたこと、また

フダラク信仰という二点を挙げている。

そのうち、フダラク信仰に関しては、『華嚴經』に説く海上の山、また『大唐西域記』に説く、海近くにあつて「山径危険、巖谷峻傾。山頂に池有り。其の水澄鏡なり。流れて大河を出す」などという南インドのフダラク山と自然相が似ていると見られたにちがいない。史料の中にも白山をフダラク山だというものがある。『泰澄和尚伝記』の越知神社蔵本（元和五年〔二六一九〕書写。識語によれば寛弘年中〔二〇〇四～一〇一二〕以前の成立）で、貴女が泰澄に神統譜を語っていく条に、キミ二神が淡路国を生み、「其の後大八島作り給ふ。此の中に大山有りて白山と号く。即ち観音浄土補陀落山是なり」とある。ただしこの部分は金沢文庫本・平泉寺白山神社蔵本・白山比咩神社本などの古写本には見えないようで、後補にかかろう。成立年不詳という『白山禪頂御本地垂迹之由来伝記』にも先と同様な文がみえ、また白山禪頂は「誠に補陀洛仙観音の浄土なり」ともいう。これらは古い史料とはなすがたいが、ただ、白山比咩神社に伝わる『白山之記』の末尾近くに、三井寺の人、譬喩房阿闍梨が白山禪頂に参詣して、「補陀落本栖振捨如何茲越白山」（補陀落の本の栖を振り捨てて如何で茲まで越の白山）という歌を権現に詠みかけたところ、権現も「仏滅長夜迷以来輪廻類導」（仏滅の長夜に迷ふ以来の輪廻の類導かんとて）と返したとある。白山の観音をインドのフダラク山から移ってきたとしており、やはり白山をフダラク山に擬していたわけだろう。『白山之記』は内部徴証から長寛元年（一一六三）の成立（永享十一年〔一四三九〕書写）と考えられているが、この部分は識語にいう正応四年（一二九二）以前の後補にかかるとみられる。

泰澄の時代にすでに白山をフダラク山とみなしていたかどうかを史料に探ることには、なおむずかしい。けれども、以下に述べることから、泰澄の体験において白山禪定に観音を折り出した時、白山がフダラク山とみなされる必然は十分にあつたと私は思う。山岸氏もいう、泰澄ら海民が受容した海上守護の観音信仰はどこからやって来たのか。従来はあまり明確には論じられてこなかった問題だが、ここであらためてその考察が必要となる。

八世紀前半当時に泰澄ら北陸の海民がもっていた観音信仰は、都に定着したものが地方へも伝播したものとは考えにくい。なるほど『泰澄和尚伝記』には、天平八年、和尚五十五歳の時に唐から帰朝した玄奘（玄昉）和尚を尋ね、将来の経論五千余巻を披閲礼拝讃嘆し、特に『十一面経』を授けられ、早速翌年、勅宣によって十一面法を修し、当時天下に流行していた瘡瘡を収束させたという事跡が語られている。正史にはみえない伝承だが、帰朝した玄昉がその将来した龐大な経典とともに都に十一面観音信仰を含む密教的観音信仰をさかんにしたことは、写経や造像の面の検討からして史実と認められる。ただし、十一面観音は法隆寺金堂第十二壁の壁画に描かれ、熊野の那智経塚遺跡からは七世紀後半の制作とみられる像が発見されているなど、十一面観音信仰は玄昉帰朝以前から日本に存在した。天平五年に『大乘十一面経』（『十一面神呪心経』）の書写が行われた記録も『大日本古文书』には残っている。また、『伝記』の記述に即しても、泰澄は五十五歳で玄昉を尋ねるはるか以前、十四歳の時に夢で十一面観音への帰依を教えられ、越知山に赴いて「南無十一面観世音神変不思議」と唱えながら修行を開始したことになる。泰澄はすでに少年時より十一面観音信者となつて験力を得ていたが、後年都に著名な帰朝僧、玄昉によつて大量の経論を学び、いわば正規に『十一面経』にもとづく十一面法も会得してさらに験力を増した、と『伝記』は主張しているのだろう。ともあれ、『伝記』自体も泰澄の十二面信仰を、玄昉、あるいは都の流行によるとはしていない。ではそれは何に由来したというのか。十一面観音信仰が都の流行に先んじて越の白山禪定にはなばなく樹立されたという『伝記』の語りを、歴史の相の中でどう読み解けばよいのだろうか。

示唆はすでにその観音信仰の主体が海民であるという点に含まれていたのだが、泰澄らの十一面観音信仰は、外来文化の受容では先進的な部分をもつた古代の北陸地方において、他の多様な文化とともに海から伝来してまずは海民に受容されたものだったと思われる。古代の北陸がその地理的条件から大陸・半島文化受容の先進地域の一つであったことは、すでに多く説かれている。文献では垂仁紀におけるツヌガアラシト伝承、正史における度重なる北陸への高句麗船・渤海船の来着・漂着の記録、『延喜式』『神名帳』における新羅系・高句麗系の神社の存在など、また数

多い遺跡・遺物の発掘調査による考古学の知見によっても、古代の北陸地方には大陸・半島から人や文物がしきりに海を渡ってきたことが知られる。おそらくは、海の観音信仰もその一つであったのだ。そしてその信仰とは海上守護のフダラク信仰、すなわち南インドに発してはるかな波路をたどり、中国の普陀山に定着し、やはり海路を通じて朝鮮の洛山や日本の那智にも運ばれ、移植された信仰であった蓋然性が高い。この推定は年代的にも符合する。洛山や那智へのフダラク信仰の定着は七世紀後半ごろと推定され、そのころ東アジアの海でフダラク信仰伝播の強い波が発生していたと考えられる。まさにそのころ、あるいはその直後に、いちはやく泰澄ら北陸の海民の間にも観音信仰が広まっていたのである。

海のフダラク信仰の伝来、受容は、たんなる物や技術のそれとは異なる位相をもっていた。それは精神的なものの伝播として、生身の人から人へと伝えられるものであった。ある場合には外国人から日本人へ、また日本人から日本人へ。そしてそれは、海民にとって何よりも海上における生命の保全につながる切実さをもって受け止められた。私には、その個々の切実さの膨大な集合、集積こそが、越の大徳、泰澄像を創出し、そして彼らの信仰を白山禪定の高みにまで押し上げるエネルギーの源泉になったと思えてならない。

なお、泰澄らの信仰は観音の中でも特に十一面観音に寄せられたのだが、そのことについてもふれておこう。

フダラク信仰において信仰の対象となった観音は、むろん顕教の観音に限らず変化観音もあった。インドにおける観音信仰の密教的展開につれ、フダラク山の観音も聖観音のみならず十一面・千手・如意輪・不空罽索などにも考えられるようになってきた。『十一面観自在菩薩心密言念誦儀軌経』・『千手千眼観世音菩薩広大圓滿無礙大悲心陀羅尼経』・『不空罽索神変真言経』(いずれも大正蔵二〇)などでは、いずれも世尊がフダラク山の観世音の宮殿において説法したことになっている。また日本のフダラク信仰においても、古いところではフダラク山から閻伽の器に乗ってやってきたという東大寺二月堂の本尊が十一面観音であり、補陀落山六波羅密寺の観音や阿波国東方海上の湯島(伊島)の観音も十一面である。フダラクから観音像やその御衣木がやって来たという観念を基本にもつ「海上がりの観音」伝承を縁起と

している寺院では、但馬の温泉寺・伊勢の正福寺・相模の長谷寺・下総の円福寺などが十一面を祀っている。

変化観音はその所拠経典に説かれる教義とともに、その怪異な面相や姿態から強力な呪力をもつと考えられ、信仰が広まった。十一面観音はあらゆる方角に顔を向け、一切衆生を救済するという。日本には玄昉が伝えて以来重んじられたとされ、十一面悔過の所拠経典の一つともなった『十一面神呪心経』(大正蔵二〇)には、十一面観音の神呪を一百八遍念誦すれば現し身にして無病であり、財宝衣食も尽きることなく、刀杖の難・水難・火難から逃れるなど十種の現世の果報と、命終の後は地獄に落ちず、弥陀の極楽世界に生まれるなど四種の死後の果報が得られるとその功德が説かれている。十種の功德の八番目に「水溺れさする能はず」とある。唐の玄奘訳『十一面神呪心経』に先立つ、北周耶那崛多の異訳『仏説十一面観世音神呪経』ではそこを「一切の水難・漂溺さする能はず」としている。この観音への海民の信仰は、教義としてはこのあたりに根ざっていたことになる。

三 古代の能登島と臥行者

『泰澄和尚伝記』にいう。越知山で修行する若き泰澄和尚のもとへ能登島から小沙弥が尋ねてきた。和尚は予期していたように笑って迎え、最初の侍者とした。激しい修行をする若き和尚に小沙弥はたえず影のように従い、風寒堪えがたくとも常に雪の底に臥して和尚のようすをうかがっていた。そこで臥行者と名づけられた。

北海を行く船に越知山から鉢を飛ばして糧米を乞い、和尚にたてまつった……。

臥行者の出身地とされる能登島は、能登半島の七尾湾に浮かぶ低平な、周囲約七十二キロの島である。縄文・弥生の遺跡も多く、早くから人が居住したことがわかる。古墳時代には現七尾市域に居住して勢力を張った能登臣の支配下であり、現七尾港付近に比定される古代の要津、香島津は島南部の向かい側にあたる。臥行者の時代、七・八世紀ごろには律令制に移行したが、そのころの能登島の生業は、造船と製塩で特徴づけられる。

古代において造船は能登全体でさかんで、古くから舟木部も置かれ、ヤマトの王

権は北方攻略や大陸・朝鮮半島との通交に能登の造船に期待したことが各種関係史料からうかがわれるが、能登島での造船に関しては『万葉集』に人間の息吹の通う一資料がある。天平二十年（七四八）春、当時越中守であった万葉歌人大伴家持は出拳の視察のために諸郡を巡行したが、その折「香島の津」から船で「熊来の村」をさして往く時に（以上、題詞による）、

とぶさ立て舟木伐るといふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びぞ

（巻十七・四〇二六）

と旋頭歌を詠んだ。「とぶさ（鳥総）」は木の梢の枝葉のこと、伐木の際、木の精霊に対する儀礼としてそれを伐り、立てたらしい。「能登の島山」は能登島を指すとしてよく、木々繁茂する能登島のありさまを神々しく悠久だと讃えている。この歌によつて当時能登島は船材を産する島として知られていたことがわかるし、造船が行われていたことも推測される。造船にはまた操船の技術ともなうわけで、つまり当時の能登島は海民の根拠地だったとみられよう。一方、能登半島の土器製塩に関しては、立地のよい内浦の七尾湾岸でまず始まり、六世紀後半ごろ八世紀前半ごろが最盛期であったが、中でも四面海に囲まれた能登島は代表的な塩産出地であったことがわかつている。¹⁵⁾

七・八世紀における能登島の生業を特徴づける造船と製塩は、ともに海民の業である。そして海民は、それらの生業を通じて海のネットワークに結ばれていた。たとえば齊明紀には、越の国守であった阿倍比羅夫が北方の蝦夷や肅慎国を討伐したという記事が四年（六五八）四月・四年是歳・五年三月・六年三月各条と四度までみえるが、その折の軍船百八十艘（四年四月・五年三月）や二百艘（六年三月）には必ず能登において調達した船が含まれていたはずで、軍勢にも能登の水軍が加わっていただろう。事実、六年三月条には能登臣馬身龍の戦死が伝えられている。記事中でそれが特筆されているところからすると、能登臣が率いた能登の水軍はむしろ阿倍比羅夫軍の有力な一部を構成していたと推察される。そして能登臣の水軍は、当然北方への海路にも通じていたわけだろう。

あるいはまた、能登島の式内社伊夜比咩神社は、森田平次の『能登志徴』に「按ずるに、越後国蒲原郡伊夜比古神社と雌雄の神なるべし」というように、越後国の

伊夜比古（いやひこ）神社と深い関係があったと考えられる。浅香年木氏は、『伊夜比古神社記』を引くなどして両社が対馬暖流を媒介とする「海ッ道」によつて直結し、上社と下社に類した関係にもなった、伊夜比咩神社の当初の姿は「船木伐る塩山」の守護神であったと推理している。¹⁶⁾ 能登から越後へ、さらにその先へも海上ルートは延びていたのである。

一方南西の方向にも、『延喜式』「主税上」の「諸国運漕雑物功賃」条から読み取れるような「加島津（能登）——比楽湊（加賀）——敦賀津（若狭）」という海路は古くから開かれていたはずだし、そのルートはさらに西方の但馬・出雲とも結んでいた。『出雲国風土記』「意宇郡」の国引きの段に、出雲の八束水臣津野命が「高志の都都の三埼」を引いてきて「三穂の埼」としたとあり、「高志の都都の三埼」は能登半島の珠洲の岬のこととも新潟県上越市直江津付近の岬のこと（『和名抄』に「都字」郷がある）ともいわれるが、いずれにしても越と出雲との古くからの海路による交通を示唆している。

さらに、能登は大陸・朝鮮半島とも直接交通した。渤海使は能登に三度来着しているし、天平宝字七年八月（七六三）には日本からの遣渤海使船に「能登」と命名している（『続日本紀』）。延暦二十三年（八〇四）六月には能登国に渤海使を迎えるための施設「客院」の造営が命ぜられ、翌年七月には珠洲郡に外国船が漂着している（いずれも『日本後紀』）。それらは国の外交レベルでの記録であるが、他方長い間には大陸・半島との民間的な接触や交流も広汎に行われたにちがいない。古代の日本海にはそうした海上ルートが存在し、またルートからはずれた漂着も多かったのだ。天長元年（八二四）四月ごろ能登国に新羅琴や鋤・碓が漂着したことを伝える記事（『日本紀略』）は、それが偶然の漂着であり、またその「寄りもの」が楽器や農具であるだけに、大陸・半島の生活文化が日本の海岸地帯へいわば自然的に伝来していた状況を想わせる。大陸や朝鮮半島の側から見ると、対岸に弓状に細長く横たわる日本列島の、能登はまん中に突き出た半島である。能登島には、七世紀中ごろの築造で高句麗式の様式をもつとされる須曾蝦夷穴古墳も存在し、その被葬者について高句麗からの人々の来住も考えられている。『延喜式』神名帳には珠洲郡に「古麻志比古神社」がみえるが、「古麻」は「高麗」（高句麗）を意味するとも

いわれる。鳳至郡の「美麻奈比古神社」「美麻奈比咩神社」は朝鮮半島南部の任那から来住した集団が祀った神にちがいない。

以上のように、能登島、また広く能登半島では古くから海民がさかんに活動し、彼らは海のネットワークを通じて他地域や外国と結ばれていた。伝承の臥行者もその集団の中から出たので、その海民の交通や信仰のつながりから越知山の泰澄のもとに赴いたというのだろう。そして日本海の海岸伝いのネットワークの存在や能登への外来文化の直接的な伝来を考えれば、能登島で小沙弥であったという臥行者の信仰も、泰澄の場合と同様、海からやって来た可能性が大きい。

なお、能登島には臥行者にゆかりがあるという地名がいくつか伝えられている。行者の母が住んだ所が祖母ヶ浦、行者が寝て暮した所が閨村で(『能登名跡志』)、蜂崎(鉢ヶ崎)も行者の鉢に由来するという伝えがあった(『能登志徴』)。しかし、これらはすべて泰澄伝承の流布とともに後世に付会されたものだろうか。

四 能登の観音信仰

古代の能登島や能登半島は海のネットワークに結ばれていたため、臥行者がもつたらしい海の観音信仰もそれによって伝来、受容された可能性がある。ではその古代の能登における海の観音信仰の伝来、受容の痕跡が、後代の能登の観音信仰についての伝承の中にわずかにでも残されていないだろうか。古代能登の観音信仰について、史料にはまったく恵まれない主題ではあるけれども、ここではとりあえず過去の能登の観音信仰を代表する「能登三十三観音」の札所についての古伝承などを手がかりとしてみよう。

安永六年(一七七七)ごろ、太田頼資によって書かれた『能登名跡志』をみると、そのころ能登には多くの密教(真言宗)寺院が営まれ、あるいは廃絶したものも多かったことがわかる。元禄以前には成立していた「能登三十三観音」の札所についての記述も多くみえる。

「能登三十三観音」は近世に流行のように全国各地に簇生した幾多の地方的三十三所の一つであり、その点では珍しいものではないが、その成立には独自の事情も

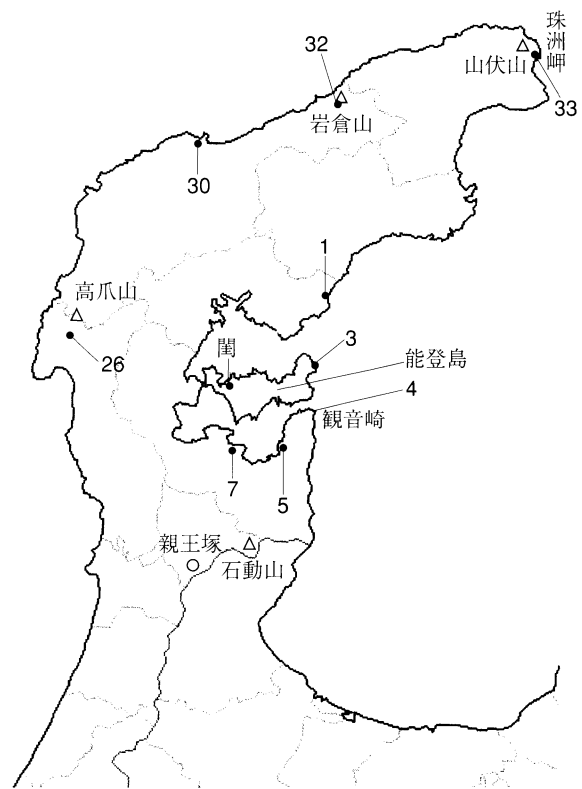
介在したようである。文明三年(一四七二)の蓮如の越前吉崎進出を契機として北陸地方には浄土真宗が急速に広がり、能登にもそのころ以来真宗勢力が伸張したが、「能登三十三観音」は旧勢力側(真言宗・曹洞宗・修験)のそれに対抗する動きとして、旧来の観音霊場(観音寺院や観音堂)をネットワーク化して成立したという側面をもつらしい。それ以前、中世の能登では口能登に位置する石動山を本拠とする石動修験が栄えたことがよく知られているが、由谷裕哉氏によれば、近世に札所となった観音霊場も中世にはその石動修験の支配下、影響下にあった所が多かったという。ではさらに、その石動修験が栄える以前、古代能登の観音信仰はどのようなありさまであったのか、ということがここでの関心事である。札所の中には古い由緒を主張し、また海辺に立地して海の信仰にかかわるところも多い。そのいくつかを取り上げてみる。

能登島の東端に能登三十三観音の三番札所、嶽の宮があり、泰澄作という十一面観音像を伝える。島の西方の閨は『能登名跡志』などに臥行者の住地といい、閨観音堂を伝えるが、現在の観音堂や本尊聖観音像は応永二十六年(一四一九)ごろに造られたとみられている。ただ、『能登名跡志』に「昔は大楽寺とありしに今は寺なし」というように、そのあたりにはかつて大楽寺という真言寺院が栄えていたらしい。

能登島の東南方の崎山半島先端部を「観音崎」という。その出先、今ではほんの四十メートルばかり陸地から離れて鹿渡島という小島があり、小観音堂が建てられている(四番札所)。その本尊千手観音は文武天皇代(六九七―七〇七)に海中から出現したものと地元で伝え、龍燈が折々にあるという(『能登志徴』)。その他、能登島の浮かぶ七尾湾岸で、五番札所、大田の海門寺の千手観音像は保元三年(一一五八)の銘をもつて能登地方の現存観音像としては古く、七番札所、小島の妙観院は大同年間(八〇六―八一〇)の創建と伝え、本尊聖観音像は鎌倉時代初期のものとされる。妙観院のある場所は古くは文字通り海上の小島であったようで、文明十二年(一四八〇)、能登に滞留していた招月庵正広(歌人。正徹の弟子)の歌に、「古寺残灯」と題して、「此浦の南の小島補陀龍具のはじめはこれが残るともし火 小島の観音とてましますをよめり」とある。観音の祀られた小島が小フダラク

とみなされた時代があったようだ。能登島の北東方、一番札所、諸橋の白雉山明泉寺はかつて大伽藍を擁した観音寺院で、孝徳天皇の白雉年中（六五〇～六五四）の草創を伝える（『能登名跡志』）。以上に挙げた各伝承における実年代はそのままには信じがたいとしても、少なくともこうして能登島および七尾湾周辺には観音寺院が密集し、そろって古い由緒を主張していることは歴史の深度を感じさせないでおかない。『泰澄和尚伝記』において臥行者の出自を能登島としていることもゆえなきことではあるまい。

さらに奥能登やその周辺にも視野を広げると、三十番札所、輪島市鳳至町にある誓願寺の如意輪観音は三国伝来の尊像で、寺は養老四年（七二〇）、泰澄の開基と伝える（寺伝）。また、三十二番、同市町野町の白雉山岩倉寺の本尊千手観音は白雉二年（六五一）漁夫の網にかかっていた海上がりの霊像であるという（『能登名跡志』）。寺は岩倉山（標高三五七メートル）中腹に建つが、近くに式内岩倉比古神社が存し、岩倉寺はその別当寺であって本尊観音は岩倉比古神の本地仏とされる。曾々木海岸近くにそそり立つ岩倉山は船人の指標となる岩山であり、その社と寺の



能登地方 数字は「能登三十三観音」札所を示す
(作図には「Craft MAP」を利用した)

関係は、船人や地元の人々の自然発生的な岩山信仰の上に観音信仰が習合していったかたちをそのまま示している。その習合の年代はかなり古いだろう。

奥能登やその周辺にある航海の指標となる山といえば、ほかに高爪山と山伏山が有名だ。能登富士とも呼ばれる秀麗なかたちの高爪山（標高三四一メートル。輪島市と羽咋郡志賀町の境にある）は「西海の出先に高く聳へ、渡海船の見当とす」という山で、頂きに観音堂があり、毎年六月十八日の祭礼にあたっては前夜に龍燈が上がる、また六社権現高爪山社の別当寺が二十六番、金龍山大福寺で、『貞享二年由来書』に大宝三年草創、本尊は行基の作と伝えている（『能登志徴』）。一方、半島東北端の珠洲岬に近い山伏山（高坐山・鈴ヶ嶽とも。標高一八四メートル）はやはりその地勢からして目に立つ山であり、『能登名跡志』に、「又三崎の山伏山とて、此国五十里のとまり北のはてにある高山也。……渡海の船難風に出合、三崎権現に祈るに火見ゆる也。夫より山を見て難をのがると也。……高山に而其上古木も覆うて渡海の見当となる名山也」と船人に信仰された山としている。式内須須神社の本社高倉宮が山頂に営まれ、ふもとの須須神社のそばに別当寺、三十三番、高坐山高勝寺（現在翠雲寺）がある。岩倉山・高爪山・山伏山はともにその地域に目立つ山として信仰を集め、海民の信仰も厚く、そして在来の山の神信仰に観音信仰が習合していったかたちを共通して示しているのである。

以上、能登の観音札所のいくつかにふれてきたが、能登は海辺に観音寺院や観音堂が多い。しかもすでに述べたように、奥能登や七尾湾岸の海辺の観音寺院が海民の熱い信仰に支えられてきたことを一特徴とする。由谷裕哉氏もこの点にふれ、次のように分析している。すなわち、能登の札所には龍燈伝承が数カ寺にみられる、山アテ利用の山の頂きに立地する所が多い、海からの漂着者に関する伝承がある、観音像の漂着・海中出現伝承も四カ寺まである、また海上守護や豊漁の霊験伝承も多い、つまり、奥能登や七尾湾岸の札所では海で生活する人々の信仰とつながる信仰伝承がきわめて多い、これはいうまでもなく能登の地域住民の生業形態と密接に関連した信仰形態の現われである、と。同意できる見解だ。²⁰⁾

観音と古墳にまつわる、やや風変わりな伝承もある。中能登町小田中の親王塚古墳は四世紀後半ごろの築造で崇神天皇の皇子、大入杵命の墓とされ、すぐそばに

亀塚古墳もともなう。大入杵命は崇神記に「能登臣の祖」とされている。そして『能登名跡志』には、この古墳にまつわって次のような伝承を載せている。入左近という人の子、太郎が、観音の夢の教えによってその尊像を守りとして筑紫湯から唐土に渡り、観音の教えによって国王の娘と首尾よく婚姻をなし、国王となった。太子も数多くできたが、そのうちに太郎は故郷がゆかしくなり、観音に祈って大亀の背に乗って無事小田中に帰ることができた。崩じた後は太郎を所の氏神と崇め、亀の形を塚に築き、骸を納めた。五町ばかり山奥に守りの観音堂(十番札所)がある、というのである。親王塚の場所には明治八年に塚が大入杵命の陵墓と指定されるまで、能登臣祖神社が存在したという。豪族能登臣の祖の大陸渡りの物語だが、その祖先の守り神が観音であること、観音が航海を助けたとされていることにも留意される。あるいはこの伝承の発生はせいぜい中世くらいなのかもしれないが、能登臣の祖を唐土と結びつけ、しかも観音の庇護を説くという能登の人々の間に育まれた伝承の、その想像力の方向に興味を惹かれるのである。

先の由谷氏は、能登三十三観音札所に海で生活する人々の信仰とつながる信仰伝承が多いこと、および中世期における各札所の支配被支配関係の考察から、「観音信仰の現世利益、特に海上守護のような海民の信仰にその利益を唱導して、修験者と共に石動山系の修験者が各々の地域社会と接触してきたことが、これらの地域的霊場発生の背景にあつたのではないかと考えられる」と述べ、能登の観音霊場の発生を中世にみようとしているようだ。観音霊場に対する石動山系の修験者の深い関与は、たしかに能登の観音信仰の中世的形態を示すといえよう。また、たとえば『梁塵秘抄』には、

われらが修行に出でし時 珠洲の岬をかい回り うち巡り 振り捨てて ひとり越路の旅に出でて 足打ちせしこそあはれなりしか (巻二、三〇〇)

という今様がみえ、院政期には北陸道を巡る修験者が珠洲の岬にまでも足を伸ばしていたことが知られる。当時すでに先述の山伏山・岩倉山など奥能登の観音霊場も彼らの行場となっていたのだろう。地方における観音霊場の発生について、摂関後期から院政期にかけては山林修行をこととする聖が活躍して行者や貴賤の信者を集め、その聖の住所としての「別所」が各地に観音霊場として形成されていった例が

多いという考察²²⁾もあって、能登にもあるいはそうした歴史的展開の中で発生した観音霊場も存するかもしれない。しかし、能登の観音霊場に残存している伝承群は、由谷氏も強調するように海民の生業に深くかわるという性格を蔵している。みってきたような海辺の観音霊場が語る古い由緒や伝承、特に航海や山アテの指標となつた山に観音信仰の習合した姿などは、中世や院政期を突き抜けて上代へとさかのぼる可能性を十分にもっている。

能登の観音霊場の信仰史や伝承を通じてうかがわれる、能登の海辺にかつては濃密に存在したらしい海の観音信仰。その源流はやはり白山の項で述べたような北陸地方に古代に伝来、受容された海のフダク信仰に探らざるをえない。それは前節に述べたような、古代において能登の海民が生業を通じて結ばれていた日本海のネットワーク、また大陸・半島との交流を通じて伝来したものであろう。泰澄伝承における臥行者の姿は、やはり古代能登における海上ルート²³⁾の存在と伝来した海の観音信仰の一つの結節点をなしていると思う。

近年刊行の『能登国三十三観音のたび』²³⁾などを手引きとして、いま能登半島の札所を少し巡っても、現在の能登半島で観音信仰がさかんだという印象はほとんど受けない。多くの寺院は三十三所札所の標示もなく、さびれている。観音堂と呼ばれる所のひっそり、小じんまりとしたたずまい。かえって集落の中やほとりに目立つのは真宗寺院の黒々とした大屋根で、真宗は檀家の支持のもとに現代においてもなお優勢のようである。これは、述べたように、能登に真宗が浸透した十五、六世紀くらいから続く形勢、風景なのだろうが、また神仏習合の色濃かつた観音寺院が明治初めの神仏分離政策の打撃を深く蒙つた結果でもあり、さらに現代の過疎化や現代人の「無宗教」化も拍車をかけていることだろう。けれども、歴史をさかのぼるなら、近世初期に「能登三十三観音札所」が組織されたころにはまだ民衆の観音霊場への支持も大きかつたはずだし、中世の修験は神仏習合で観音という性格を重視した。そしてさらにずっと古く、越前で泰澄が白山に観音信仰を持ち込んだ八世紀前半ごろには、能登地方においても海辺や海辺近くの山などで在来の神さびた神たちと今来の観音が交わってゆく信仰の風景が展開していたのではあるまいか。

- 注
- (1) 『福井県史 資料編1 古代』（一九八七年）所収の翻刻により、その校異も参照する。
- (2) 玉井敬泉「白山の祭神と信仰」（民衆宗教史叢書一八『白山信仰』所収、一九八六年）。
- (3) 「白山大鏡第二神代巻初二」（山岳宗教史研究叢書17『修験道資料集（I）東日本篇』所収、一九八三年）にも、「持統天皇越知娘五年、越前国足羽南郡阿佐宇津渡守、為泰角於父生、古志路行者秦泰澄大德是也」とある。「白山大鏡第二神代巻初二」は同書の山岸共氏の解題によれば鎌倉時代の成立と推定される。なおまた山岸氏は、同書に「秦泰澄大徳」とある点に注目し、泰澄の出自を新羅系渡来氏族の秦氏であるとしている（「泰澄伝承」、民衆宗教史叢書一八『白山信仰』所収、一九八六年）。
- (4) 山岸共「白山信仰と加賀馬場」（山岳宗教史研究叢書10『白山・立山と北陸修験道』所収、一九七七年）。
- (5) 長坂一郎「泰澄和尚伝」と越知山」（福井県立博物館紀要」1、一九八五年三月）。
- (6) 『丹生郡誌』一九三頁（一九〇九年）。
- (7) 白山比咩神社社務所編『白山比咩神社略史』（訂正増補六版、二〇〇一年）。
- (8) 『福井県史 資料編1 古代』の翻刻による。
- (9) 上村俊邦編『白山信仰史料集』（二〇〇〇年）の翻刻による。美濃側の石徹白に伝わる史料である。
- (10) 本文・訓読は日本思想大系『寺社縁起』による。
- (11) 石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』（一九三〇年）は、天平七年帰朝の玄昉、同八年来朝の菩提僊那の将来經典の影響を指摘している（四七頁）。また、速水侑『観音信仰』三七頁、八六頁ほか（一九七〇年）。
- (12) 卷七、一九頁。注(11)の石田氏の書、「附録」八四頁にある。
- (13) 古代における海のフダラク信仰の伝播の一端、また洛山信仰の成立については、拙稿「洛山寺考——朝鮮の補陀洛の成立について——」（甲南女子大学研究紀要」四一、文学・文化編、二〇〇五年三月）に述べた。
- (14) 参考、『新修七尾市史2 古代・中世編』（二〇〇三年）。
- (15) 橋本澄夫「古墳文化と須曾蝦夷穴古墳」（能登島町史 通史編」所収、一九八五年）。
- (16) 浅香年木「古代の能登島」（能登島町史 通史編」所収、一九八五年）。
- (17) 参考、注(16)の論文。
- (18) 参考、由谷裕哉「能登地方の観音霊場——地域の霊場の発生と三十三所成立の周辺——」（『日本民俗学』一五四、一九八四年七月）。
- (19) 七尾市教育委員会文化財課編『七尾市の文化財』（二〇〇六年）。
- (20) 『松下集』八五三（新編国歌大観八所収）。
- (21) 注(18)の論文。
- (22) 注(11)の速水氏の書、第三章第二節「院政期における観音霊場信仰の展開」。
- (23) 西山郷史『能登国三十三観音のたび』（二〇〇五年）。

Belief in Kannon in Mt. Haku and Noto
——Concerning belief in Fudaraku of early date——

KANNO Tomikazu

Abstract : According to a book titled “the biography of monk Taicho”, Mt. Haku had become a mountain of belief in Kannon after a monk called Taicho climbed it in the early 8th century. Monk Taicho had probably been a worker of the sea in Echizen before that. His belief in Kannon spread through the network of the Japan Sea, and as for belief in Fudaraku of the sea, it is considered to be the first one to be accepted to the workers of the sea in Hokuriku area.

It seems that this belief had also spread around Noto area, since there are still some old traditions about belief in Kannon of the sea left in the old Kannon temples in Noto.